丹沢	裏から表へ（長者舎から桧洞丸、ユーシン）	No.022

とにかく前代未聞、驚きの限りである、この旅で見たものは。
登山の記録よりも「驚きの体験記」のほうが価値があるかもしれない。
恩田の計画に乗り、恩田の会社の先輩の野見山さんという方と三人の旅となった。

昭和 38 年 8 月 24 日（曇り）
八王子駅横浜線ホームに集合は16時40分頃だった。横浜線に乗り15分ほどで橋本駅に着いた。
橋本駅から道志川の東野に行くバスに乗る。バスが発車した時はもう薄暮の18時20分。
東野着は20時05分、後ろからコツンとやられてもわからないような暗闇の中を20時15分出発。
道志川の流れを眼下に聞きながら長者舎（ちょうじゃごや）へ向かう。青根から支流の神之川（かんのがわ）の谷に入り、長者舎山荘に着いたらもう 22時30分になっていた。大室山・桧洞丸蛭ケ岳などの質感のある山から伸びる尾根に囲まれた谷間で、神奈川県の西端に位置する。海抜 500m弱、暗く静かで涼しい。
「こんばんは」 と声をかけて小屋に入ると、土間に座った犬が 「ワン」 と一吠え。
オヤジさんがこっちを向いて、「遅いのによく来たなぁ、さぁ奥へ入んな」
犬は安心したのか、尾を振って我々を歓迎するように見つめている。
豚汁を作り遅い夕食を済ませるともう 24時を回ってしまった。
オヤジさんが 「さ、寝るか」 と言って土間から立ち上がると、犬も立ち上がり 「ウンウン」 と首を振り、土間の奥に消えていった。我々三人も0時15分に就寝。

昭和 38 年 8 月 25日（曇り）
朝出発の時、我々は決定的な驚きを体験した。
出発の準備を整えて小屋の前に立つと、すでに道路を散歩していたオヤジさんが 「ヤッホー!!」 とやった。
すると足元の犬が後ろ足二本で立ち、「ヤッホー!!」 とやったからたまらない。
我々三人はただただ驚くばかり、オヤジさんが四方の山々に響かせると、すぐに犬も響かせる。
オヤジさんに別れを告げて、神之川に沿った道に入ろうとすると、犬が我々の前に立ち、時々振り返りながら林道を先に立って歩いて行く。この犬は我々を導いているようだ。
歩きながらオヤジさんを真似て「ヤッホー!!」 とやってみると、やはり二本足で立って長く「ヤッホー!!」
何度か繰り返しているうちに犬は立ち止まり、我々が通り過ぎてもついて来なくなった。
「ここから先は自分で行け」 と言うようにその場に立って我々の行く手を眺めている。
曲がり角で 「ヤッホー!!」 とやって見ると、犬は一声応えて小屋に戻って行った。
とにかくこの山行ではこれしか印象に残っていない。犬越路への道を右に分けて神之川の流れに沿って南へ遡り、小尾根に取り付き主稜線の金山谷乗越（1316m）に出た。
（下画像：金山谷乗越にて　左から　野見山・小林・恩田）

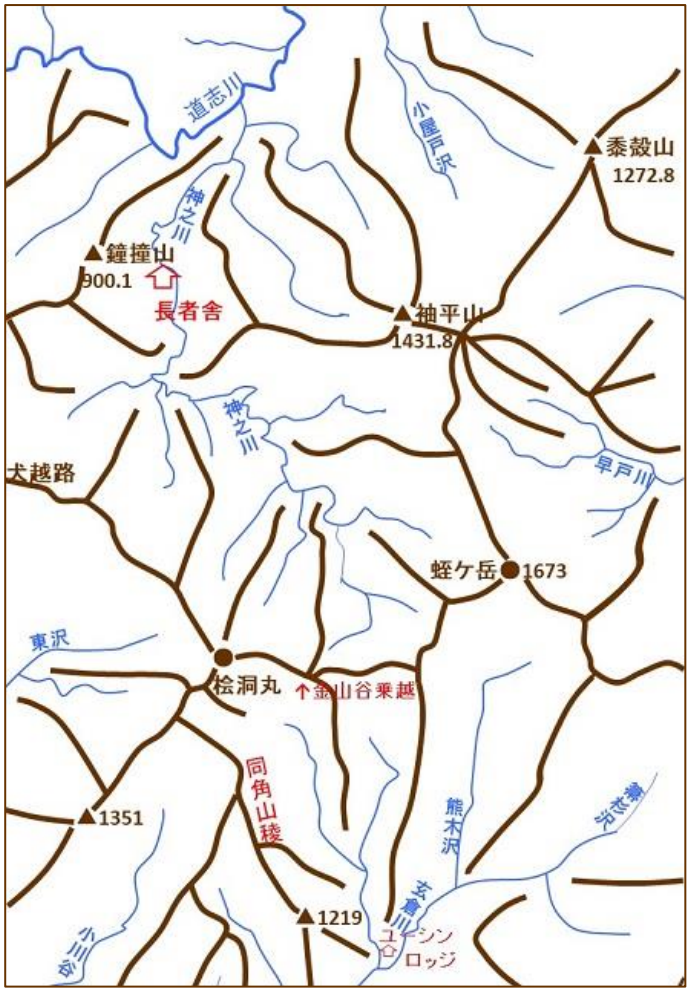
主稜線を西に登り桧洞丸（ひのきぼらまる・1600m）。鬱蒼と茂る深い樹林の中のピークでしかも霧に囲まれて展望は得られない。
南へ下る同角山稜に入り、同角ノ頭（1491m）・石小屋ノ頭（1353m）を経てユーシンロッジに下山した。
ユーシンから玄倉川に沿って玄倉まで歩き、バスで新松田駅に出た。玄倉は丹沢湖・三保ダムができてすっかり変ってしまったが、この山旅の頃にはまだ西丹沢の山奥の静かな集落だった。

踏　み　跡　＜　My　mountains　＞

西丹沢の山に入ったのはこれが初めてで、しかも道志川から入ったのでその山塊の大きさと深さが体感できた。東丹沢のポピュラーなハイキングコースの山とは全く異なる「深山幽谷」というのが第一印象として残った。

それにしても、長者舎山荘で見た犬と人間の心が完全に通い合っている世界は驚きだった。長年の二人（?）きりの生活のうちに、互いに相手の言語を理解しあってしまったのだろうか。この驚きの支配感が強すぎて、山を歩いたことの記憶量が少なくなってしまった。

以上



<後日談>

10年余り後になって、どこかの山に登ったときに山小屋で出会った方から聞いた話によると、長者舎山荘のオヤジさんは昭和41年に亡くなり、犬はそれっきり姿を消してしまったそうだ。
最愛の人を失った寂しさに西方浄土を求めて出家の旅に出てしまったのだろうか。今でもどこかの山奥で、二本足で立って「ヤッホー!!」と唄っている犬の姿が閉じた瞼に映ることがある。

昭和37年11月に川苔山で見た「道案内犬」に続き、この山行ではこんな犬と出会った。
私の山旅には犬が関係するエピソードが付いてくるのだろうか。

（修正・更新：2023年9月）